

『桜川』注釈(一)

吉田 健一・松本 麻子

キーワードⅡ『桜川』、俳諧、風虎、磐城、北村季吟

はじめに

磐城平藩藩主内藤義概(風虎)が、松山玖也に命じて編纂させた俳諧発句集『桜川』の注釈を掲載する。本稿は(一)として一〇五〇句の注釈を行った。底本には大東急記念文庫本『桜川 上下巻』(加藤定彦解説、一九八五年、勉誠社)を用いた。翻刻にあたり、底本の旧漢字、異体字は現行の字体に改めた。底本で仮名書きとなっている言葉の一部を漢字に改め、統一されていない表記は歴史的仮名遣いにし、踊り字を平仮名に改め、濁点のないものは濁点を施した。これらを底本どおりに復元できるよう、本文に振り仮名で示した。また、底本の難読字には括弧付きで振り仮名を付けた。同様に、歴史的仮名遣いと異なる表記についても、括弧付きで通常の歴史的仮名遣いによる表記を示した。各句には連番で番号を付した。

引用した和歌と歌番号は『新編国歌大観』、『私家集大成』による。引用した俳諧の句番号は、古典ライブラリーのデータベース「日本文学Web図書館」の中で使用されているものを付した。引用文献においても、一部平仮名を漢字に改め、踊り字を平仮名にし、濁点を補い、漢詩文には訓点を付した箇所がある。今回取り上げた句はすべて新春の句であることから、季語については特に指摘しなかった。「作者」欄の作者名及び作者略歴については、大東急記念文庫本『桜川 下巻』巻末の「作者索引」、角

川書店『俳文学大辞典』、『誹家大系図 古風談林正風』(雲英末雄編、一九九七年、青裳堂書店、『誹家大系図』は大系図と略)他を参照した。また、『桜川』に入集する句数を挙げた。句集『桜川』については大東急記念文庫本『桜川 下巻』の解説を参照されたい。本稿の注釈は吉田が担当し、松本が最終的な加筆・修正を行った。

桜川序

蘭を千草の香の上にをき、桜を諸木の花の王とす。かの川、その名におへり。この集、またその川の名にしおふ事、ただに故なかるべしや。或人の曰く、この川は、かの嶺より落つるとか詠ませ給ひし男女川に濫觴して、ここに流れて底井なき洩をなせり。およそ俳諧の連歌は、いはゆる新治の言の葉に根ざしはじめて、連歌に枝を交へ、菟玖波集の部の数に入

■かくて麓の塵つもりゆく山崎の宗鑑が犬筑波に中興して、なほ世に盛りの時至りける。花咲の翁が新增筑波集、鷹筑波集、これひとつ口に言ふべくはあらねど、新統犬筑波など、このもかもの陰しげく、世にきこゆめり。されば、かの風鈴軒の君もこの筑波の山水の流れをうけて、かく桜川の名をつけさせ給へりとかや。おいさりさり、いと興ありげに、浅からぬ故こそありけれ。予、はじめてこれを承りて、つらつら椿つらつらに、つら杖をつきつつ思ひめぐらし侍るに、これさまさまなる犬鷹の名だたる

筑波あれど、それは昔へ中昔へのひねたる風体にして、今のわざ草木句ひは、また異なるべきものなりければ、この集を撰びあつめて、かの大昔の跡をも忘れしめず。当世風の意気をも世の好き人に見知らしめん事を、この集のもとつ心ばへにて、しかも、かの花は梅に遅れ、牡丹にさいだちて咲くころあたかも中を得たり。かの川は、またかの山高く、かの水清き■景たぐひしなれば、かれこれの余情をとり■して、花実相對の風雅のまつただ中を顕す所の名なるべし。誠に山滴りの細う長う、末の流れ広う遠う伝はらんと、鬢の後の後の世々にも、うつかりひよんな思ひをなす事なかれ。予に仰せて序をつくらしめ給ふに、例の、心弱く受けひき侍りし、浅で片腹いたきにあらずや。

寛文十二年正月三日洛下季吟書

【語釈】◇蘭を千草の香の上に 蘭は全ての植物の中でも、最も香りがよいもの、の意。「蘭」は和歌では、「蘭／紛れなき香こそほへれ 蘭 紐」とく野辺の花の眺めも（貞敦親王御詠・五七五）の例のように、菊科の植物「ふじばかま」として詠まれることが多い。「蘭」を詠んだ俳諧の例は多く、「蘭の香を萩に薄が枝もがな」（時勢粧・六九八九・維舟）などがある。◇桜を諸木の花の王とす この言い回しは季吟の句にも見られる。「弥生にも庭の牡丹はかれ果てて（安静）／桜や花の王と見ゆらん（季吟）」（紅梅千句・第一百韻・五七／五八）。◇かの川、その名におへり 桜川の名前も花の王とされる桜に依っている。◇かの嶺より落つるか 「筑波嶺の嶺より落つる男女川恋ぞ積もりて淵となりける」（後撰集・七七七・陽成院）。◇濫觴して源として。◇新治の言の葉 『古事記』『日本書紀』に見える、酒折宮で詠まれた日本武尊の「新治筑波を過ぎて幾夜か寝つる」と火焼きの老人「日々並べて夜には九夜日には十日を」の問答のこと。これは、後に連歌の嚆矢とされた。◇菟玖波集の部の数に入る。■は虫損。『菟玖波集』には「雑体連歌」の中に「俳諧」の部がある。◇犬筑波 天文元年頃に成立した俳諧集。山崎宗鑑（生没年未詳）

編。◇中興して 「中興」は再び栄える様。第二の准勅撰連歌集『新撰菟玖波集』には「俳諧」の部立が削除されたことから。◇花咲の翁が新增筑波集 「花咲の翁」は松永貞徳（一五七一一一六五三）。貞徳撰『新增筑波集』は寛永二〇年（一六四三）刊行。◇鷹筑波集 西武編。寛永一五年（一六三八）成立。◇新統犬筑波 季吟編。万治三年（一六六〇）序。◇このもかのも あちらこちら。◇風鈴軒の君 『桜川』の編纂を命じた内藤義概。元和五（一六一九）年九月一日、貞享二（一六八五）年九月一日。本名内藤頼長、のち義概、晩年は義泰。風虎、風鈴軒などと号した。『桜川』には、岩城之住（匿名）・風山・紫硯・紫苔などとしても載る。一八歳で従五位下、左京亮に叙任。寛文一〇（一六七〇）年、父忠興の隠居により陸奥国磐城平七万石の藩主となる。俳諧、和歌を好み、宗因、維舟（重頼）、季吟、玖也らと交わる。◇おいさりさり なるほど、そうだ、といった納得の表現。◇予 北村季吟。寛永元年（一六二四）〜宝永二年（一七〇五）。安原貞室に入門した後、松永貞徳に師事し、俳諧・和歌・古典を学ぶ。自らも、多くの古典注釈書を著した。『山井』『埋木』『新統犬筑波集』など多数の俳諧関係書がある。風虎との交流は、和歌・俳諧の両面から知られる。◇つらつら椿 「巨勢山のつらつら椿つらつらに見つづ 偲はな巨勢の春野を」（万葉集・五四・坂門人足）による表現。「つらつら椿」は椿の並木、または花や葉の連なつた椿をいう。ここでは、「つら杖（頰杖）」を付きながら、「つらつら」思うに、の意の言葉遊び。◇犬鷹の名だたる筑波あれど 『犬筑波集』『鷹筑波集』など、名だたる俳諧集はあるが。◇ひねたる 古びた。◇意気 意気込み。◇牡丹にさいだちて 牡丹に先立って桜は咲く、の意。◇中を得たり ちょうど中間となる。◇清き■景 ■は虫損。「美」か。◇とり■して ■は虫損。◇花実相對 花は表現上の巧みさ、実は意味内容。◇山滴りの 山から滴る水の。◇鬢の後の後の世々 「鬢」は日本髪の後ろに張り出した部分。「鬢」の後ではないが後の世まで、といった言葉遊びか。◇うつかり ひよんな ぼんやりして。◇予に仰せて 風虎が季吟に命じて。◇浅で片

腹いたき 浅はかで笑止千萬な。◇寛文十二年 一六七二年。

〈桜川・春一〉

元日

寛文十一年亥正月上旬

1 岩とならん楠二葉御代の春

浜田春倫

〔句意〕いつか岩となるでありますよう楠の二葉を御覧なさい。盤石となるあなた様の時代の春を迎えました。

〔解釈〕◇寛文十一 一六七一年。霊元天皇、將軍は徳川家綱。内藤義概（風虎）は前年の寛文一〇年に内藤家の家督を継ぎ磐城平藩藩主となった。◇岩 朽ちることなくいつまでも存在する物のたとえ。歌例に「わが君は千代に八千代に細れ石の巖となりて苔のむすまで」（古今集・三四三・よみ人しらず）、句例に「盤石とならんすなほな御代の春」（承応元年（一六五二）歳旦発句集・五九五・友三）がある。江戸時代のことわざ「石となる楠も二葉のときは摘まめる」（譬喩尽）を参考にすれば、「楠」は成長すれば「石となる」と理解されていた。◇楠 常緑の高木。「楠は千枝なほふかき茂りかな」（続山井・三〇九〇・湖春）の句のように繁茂した大木を連想させる。◇二葉 草木などの若芽。◇御代 天皇や將軍の御代とも取れるが、ここでは前年末に家督を継いだばかりの風虎の世を指す。なお、「御代」は「見よ」の意を掛ける。

〔備考〕本句は、寛文一〇（一六七〇）年一二月に磐城平藩主内藤家の家督を継いだばかりの風虎に対する祝いの句。

〔作者〕浜田春倫（撰津・大坂）。浪花の人。宗因門。維舟門人とも（大系図）。六句。

2 太平の天守も立つや御代の春

柏木万年子

〔句意〕太平の世となり、天守閣も建つでしょう、あなた様の時代の春を迎えました。

〔解釈〕◇太平 世の中がよく治まっていて平穩であること。句例に「太平やあけて天下の春霞」（正保元年（一六四四）歳旦発句集・四三四・季吟）がある。◇天守 天守閣のこと。殿主とも。江戸城の天守閣は明暦三年（一六五七）に焼失。大坂城の天守閣は寛文五年（一六六五）に焼失した。元和元年（一六一五）に完成した磐城平城には天守閣は造られていない。句例に「霧の海にしやちほこぞぞたつ殿主かな」（宝蔵・三二九・久隆）。

〔作者〕柏木万年子（武蔵・江戸） 六三句。

3 あら玉や七宝將軍の御代の春

井口貞貞

〔句意〕なにごとく改まる新年、七宝のごとく光り輝く莊嚴な將軍の御代が新春を迎えました。

〔解釈〕◇あら玉 年、月、日、春などにかかる枕詞。「あら玉」と「御代の春」を結んだ句に、「あら玉や光源氏の御代の春」（歳旦発句集・年未詳・二四六・元知）がある。◇七宝將軍 「七宝」は仏語。七種の宝玉の意。『奥の細道』『平泉』に「光堂は三代の棺を納め、三尊の仏を安置す。七宝散うせて、珠の扉風にやぶれ、金の柱霜雪に朽て」とある。また、風虎の句に「七夕や七宝の枕玉の床」（江戸通り町・一六九）。「七宝將軍」は「聖護院の森に、紅葉の見え侍ければ／紅葉せし森や七宝聖護院」（山の井・九五八・季吟／崑山集・六二六一）及び「松に藤七宝莊嚴まき柱」（生玉万句・一二七・中明）のように、「聖護」、「莊嚴」を掛け

ており、七宝のごとく光り輝き、聖なるものを守護する厳かな將軍、の意味であろう。なお、「あら玉」の「玉」と「七宝」は縁語。

〔備考〕この句は『俳諧発句詞林金玉集』(卷之一・春一)に載る。

〔作者〕井口如貞(撰津・大坂)。浪花の人。連歌師。令徳門(大系図)。八句。

4 江戸や先^(まじ)明^(あ)くれば富士^(みよ)を御^(み)代の春

風虎

〔句意〕江戸で新年が明けるとまつさきに富士を見るように、あなた様を仰ぎ見る春がやってきました。

〔解釈〕◇江戸…富士 江戸から富士を見る句に「八景もなでう富士見る江戸の春」(時勢粧・二〇三四・維舟)、「奥州にて元旦に／富士の雪や今朝こそ江戸の花の春」(続山井・一一八九・風虎)などがある。◇先 新年になったらまつさきに、の意。◇明くれば 夜が明ければ。ここでは大晦日の夜が明けて、新年になれば、の意。

〔作者〕風虎。序の【語釈】参照。『桜川』には、風鈴軒などの別号を合わせて三二三句が入集する。

5 夏^(か)の礼による物まうや御^(み)代の春

中畑乍憚

〔句意〕夏の時代から伝わる由緒正しい礼式で人々が挨拶を交わす、そのようなあなた様の時代の春を迎えました。

〔解釈〕◇夏の礼 「夏」は中国最初とされる王朝。「夏の礼」は夏の時代の礼式。◇物まう 江戸時代の挨拶語。「頼まう」などと同じく主に玄関先で使う。「こんにちは」というほどの意味。転じて、挨拶にやってくる。句例に「物まうはどれから来るぞけふの春」(犬子集・三七)。

「物申す遠方人や春の礼」(慶安二年(一六四九)歳旦発句集・五〇五・重頼)がある。

〔作者〕中畑乍憚。陸奥・須賀川の人。等躬の号で知られる。寛永一五(一六三八)年(正徳五(一七一五)年一月一九日。通称、相楽伊左衛門。初号、乍憚。別号、一瓜子・乍憚斎。未得門。のち、調和に親しむ。晩年は露沾に親近したという。『奥の細道』旅中の芭蕉を須賀川でもてなした。一二句。

6 聖代^(せい)や地^(ち)をかへばこの御^(み)代の春

寺井道頼

〔句意〕聖なる天子の世です。風虎様が江戸から磐城平に住む場所を替えたらば、この地はすばらしい春を迎えることでしょう。

〔解釈〕◇聖代 聖なる天子の治める世。『歳旦発句集』には、「聖代の人の心や今日の春」(万治三年(一六六〇)・八三七・泰重)、「聖代の例しるき年の始かな」(寛文五年(一六六五)歳旦発句集・一〇一一・貞室)など「聖代」を詠む句が多い。◇かへば 替えたならば、の意か。◇この御代 今、我々が享受している御代、のこと。「聖代」を言い換えたもの。

〔作者〕寺井道頼(山城・京)。一句。

元日^(とし)いささか地震しければ

7 小地震や雉おどろかぬ御^(み)代の春

小沢衆下

〔句意〕小さい地震が起きたが、雉がまったく驚かずにいる揺るぎないあなた様の世の春です。

〔解釈〕◇元日… 元日に小さい地震があったので詠む、の意。これが、

1の詞書にあるように、寛文二年のことかは不明。一一年前後の地震の記録は見当たらない。◇小地震 「地震」の読み方は天正一七（一五八九）年本『節用集』及び『日葡辞書』には「なえ」。これに「小」を冠して「こなえ」と読む例として、「荻原をこなえのゆらぬ隙もなし」（ゆめみ草・一六六三・空存）があるが、音数が合わない。「地震」を「なぬ」と読む例として、「長閑なるいはがね枕かたぶきて（暫酔）／地震ふるころの庭の仮庵（季吟）」（俳諧塵塚・五五三／五五四）がある。この句では「せうなえ」または「せうなぬ」か。◇雉おどろかぬ 雉が鳴くと地震が起きると考えられていた。『桜川』よりも後の記述であるが、文政七（一八二四）年刊の『武江産物志』に「雉、王子 駒場 地震の前二鳴」の記述があり、雉が鳴くのは地震の前兆とされる。また、「雪も子路と驚きてふすか野辺の雉」（崑山集・一六〇六・亀丸）という句もあり、雉は何か異変があると驚いた様子を見せる。この句は小さい地震があつたにもかかわらず雉が驚かなかつたことを、風虎の盤石な治世としたもの。

〔作者〕小沢衆下（陸奥・二本松）。一一八句。

8 曆もやみつたひらかな御代の春

門村兼豊

〔句意〕曆の十二直にある「満」や「平」のように、満ち足りていて平穏なあなた様の世の春です。

〔解釈〕◇曆もやみつたひら 「みつたひら」は、曆の十二直にある「満」「平」をいう。これは日々の吉凶を表したもので、いずれも吉日とする。「たひら」と風虎の知行地である磐城「平」を掛ける。また、「みつたひらかな」は「水、平らかな」を掛けるか。「曆」を詠んだ句に「曆をや左に巻て三つの春」（延宝元年（一六七三）歳旦発句集・一五七四・隆榮）がある。

〔作者〕門村兼豊（武蔵・江戸）。法橋。江戸久保町住。晩年、京に移

る。南都（大和国奈良）の人。卜養門（大系図）。一六句。

9 つひたちや鞆に納る御代の春

中西弘孝

〔句意〕元日を迎えました。太刀や槍が鞆に納まる平和な御代の春です。

〔解釈〕◇つひたち 元旦。「たち」は「太刀」を掛ける。◇鞆に納る 戦が無く、刀や槍が鞆に納められていること。「鑓も鞆に治る御代やとらの年」（延宝二年（一六七四）歳旦発句集・一七五四・実信）はこの意。

〔備考〕この句は、『歳旦発句集』（延宝元年（一六七三）・一六三六）に、作者を「次之」として載る。

〔作者〕中西弘孝（伊勢・山田）。七句。

寛文九年に

10 寛文や九年の貯へ御代の春

塩川如白

〔句意〕寛文の世となつて九年間、蓄えに励んできた御領内にあなた様の世の春が到来しました。

〔解釈〕◇寛文九年に 一六六九年。己酉。◇寛文や九年 風虎が磐城平藩主内藤家の家督を継いだのは翌年の寛文一〇年。「寛文」を詠んだ句に、「寛文や七年よろしけふの春」（寛文七年（一六六七）歳旦発句集・一一六七・空存）、「寛文や七つのことし読始」（時勢粧・一〇二〇・富長）などがある。◇九年の貯へ 『礼記』『王制第五』の「国無九年之蓄、曰不足、無六年之蓄、曰急、無三年之蓄、曰国非其国也（国に九年の蓄無きを不足と曰ひ、六年の蓄無きを急と曰ふ、三年の蓄無きを、国其の国に非ずと曰ふ）」による。

〔作者〕塩川如白（陸奥・岩城）。一四九句。

陸奥久の浜といふ所にて

11 久の浜の真砂の数や御代の春

風鈴軒

〔句意〕久の浜の真砂の数のように尽きることのない、あなた様の時代の春となりました。

〔解釈〕◇久の浜 現在のいわき市久之浜町。読み方は「ひさのはま」。この句では「くのはま」か。◇真砂の数 「真砂」は細かい砂のこと。

「真砂の数」は『古今集』仮名序に「山下水の絶えず、浜の真砂の数多く積りぬれば」とあり、数が大きいものの喩え。ここでは「久」の縁語。

〔備考〕『桜川』にはこの句のように磐城平及びその近隣の地名が多く出てくる。

〔作者〕風鈴軒（陸奥・岩城）。風虎の別号。三一三句、

12 御代の春や千歳の後は後の事

大坂住董信

〔句意〕あなた様の御代の春となりました。この春が千年に渡って続き、その後もさらに続いてほしいものです。

〔解釈〕◇千年の後は後の事 「鶴亀も千年の後は知らなくに飽かぬ心にまかせはててむ」（古今集・三五五・在原滋春）、「今よりの千歳の後のちとせをも君ぞ数へてあり数にせん」（新千載・二三三七・二条為世）のように、「千年の後」に更に続く御代のことをいうか。

〔作者〕董信（撰津・大坂）。一六句。

御家督を賀し奉りて

13 庚より継ぐかの殿や千代の春

北村季吟

〔句意〕当主の座をお継ぎになったあの殿は、庚から辛に続くように、これから千年も春を迎えることになるでしょう。

〔解釈〕◇御家督 風虎は寛文一〇年（一六七〇）一二月に家督を継いだ。◇庚 寛文一〇年は庚の年。◇かの殿 あの殿、の意と「辛」を掛ける。

〔作者〕北村季吟（山城・京）。寛永元年（一六二四）〜宝永二年（一七〇五）六月一五日。近江国北邑の人。初めは京の山伏町に住し、後、新玉津嶋社中に居す。晩年、江戸に移る。法印に叙す。幕府歌学方を務めた。貞徳門。風虎と交わる。弟子に元隣、芭蕉がいる（大系図）。序文・一三九句。

陸奥岩城にて

14 天衣なでし岩城や千代の春

松山玖也

〔句意〕天女が着る衣で撫でるといふ岩の名を持つ岩城も、長く栄える春を迎えました。

〔解釈〕◇天衣 天女が着る羽衣。全国各地に羽衣伝説がある。「君が代は天の羽衣まれにきてなづともつきぬ巖ならなん」（拾遺集・二九九・よみ人しらず）、「山高み岩根の桜ちる時は天の羽衣なづるとぞ見る」（新古今集・一三一・崇徳院）と詠まれるように、天女が羽衣で岩を撫でて、その岩は未来永劫なくなるとされた。◇岩城 磐城平のこと。現在のいわき市。巖の意を掛ける。

〔作者〕松山玖也（撰津・大坂）。元和九年（一六二三）〜延宝四年（一六七六）四月二四日。宗因門。または『大系図』によると季吟門。風虎との関係が深く、磐城平を三度訪れた。『桜川』の編集者。四五二句。

15 立砂やはこび置きつつ千世の春

中堀器音

〔句意〕客を迎える立砂を玄関に運び置きつつ、岩蔵山の歌のように長く栄える春を寿いでいます。

〔解釈〕◇立砂 車寄せの前の左右両側に、編笠のような形に、高く丸く盛り上げた砂のこと。車の輓や輿の輶などをもたせかけるために盛られたもの。正月や正式な客を迎えるために造られた。「寒けれど雪は見事に山となれ（季吟）／富士に似たりし立砂の上（友光）」（新続犬筑波集・二〇〇三／二〇〇四）のように、富士山の形に砂を盛った。風虎の句に、「塵すへんやは玄関の前（維舟）／立つ砂に散りまじりたる花の風（風虎）」（俳諧塵塚・一二〇〇／一二〇一）がある。◇はこび置きつつ この表現が出てくる和歌に、「動きなき岩蔵山に君が代を運び置おきつつ千世をこそ積み」（拾遺集・六〇〇・詠み人しらず）があり、本歌とみなせる。

〔作者〕中堀器音（摂津・大坂）。柳和軒と号す。初め、器音、後、幾音。浪速尾崎町に住す。宗因門（大系図）。一一句。

16 門松の大夫かはるな千世の春

尼ヶ崎住重元

〔句意〕門松の緑が色を変えぬように、松の大夫であるあなた様がお変わりになりませんよう。長く栄える千世の春がやってきました。

〔解釈〕◇門松 正月に門前に立てる松のこと。常緑樹の松は、変わらぬものたえ。ここでは、「松の大夫」を引き出すために「門松の」とした。風虎の官職「左京大夫」に対して「右京」が対となることから、松を左右に立てる門松が連想されたか。「門松」を詠む句に、「門松の声や太

吉田健一・松本麻子『桜川』注釈（一）

夫のうたひ初め」（慶安二年（一六四九）歳旦発句集・五二八・繁秋）などがある。◇門松の大夫 「松の大夫」を掛ける。「松の位」のこと。秦の始皇帝が雨宿りをした松を大夫に任じたということから、「松の位」は大夫を指す。五位相当の者。風虎の官職は左京大夫、従五位。◇かはるな

松のように変わらないでいて欲しい、の意。風虎による長きにわたる治世を寿ぐ。

〔作者〕重元（摂津・尼ヶ崎）。二句。

17 千世の春やしらざ半分五百年

伊勢村意朔

〔句意〕千世の春と言われてもよくわからないが、その半分の五百年でも十分おめでたいのです。

〔解釈〕◇千世の春やしらざ 千年の春などと言っても実感が伴わない、の意。「しらざ」は口語表現。和歌、俳諧ともに用例は見あたらない。◇半分 句例に、「牛の爪のわれてもあふやお七夕／半分見ゆる初秋の月」（正章千句・五〇一／五〇二）がある。◇五百年 「千世」の半分。千年では長すぎて実感が伴わないが、五百年でも十分にめでたい、の意。「五百」と詠む句に、「花のものと半時や価五百金」（続山井一・一九〇八・可浅）がある。春宵一刻は値千金だが、半時なので五百金となる。〔作者〕伊勢村意朔（摂津・大坂）。寛永延宝（一六二四〜一六二八）ごろ。之次と号し、薙髪後、意朔と号す。招鳩斎と称し、大坂馳堀の住。はじめ貞徳門、のち季吟に属す（大系図）。四句。

18 一粒に千世の春をやこめざかな

谷永重

〔句意〕たった一粒に千世の春がこめられているのでしょうか。米や魚が

豊富なことです。

【**句意**】◇一粒 一粒の粃が万倍にも実る稲穂になるという「一粒万倍日」を掛ける。後世の例であるが、「一粒」を「いちりう」と読む句例に、「内室りう女は宿の長尾兵左衛門殿の姉にして、あまたの子持ち也と、へりうの種万倍子宝のなをも栄へむ黄金ざはうぢ」祝しければこととの外の悦びにて、里の名産数を尽くして贈らる。なほ古へ都の松江維舟、陸奥へ下りし時、この家に宿りて、から紙の表に書かれたる句」（あがたの三月よつき・五三・大江丸）とあるが、これは「りう女」という名前を掛けた句。◇こめざかな 米魚。「込め、盛んな」を掛ける。この表現を使った句に、「穂俵は蔵の内へやこめざかな」（慶安元年へ一六四八）歳旦発句集・四九六・種栄）がある。

【**作者**】谷永重（和泉・堺）。一句。

19 天地や一二を生じて千々の春

西岡泰徳

【**句意**】天地から一、二が始まって千年に至るめでたい春を迎えました。
【**解釈**】◇天地 あめつち。◇一二 「いちに」または「ひふ」と読むか。「いちに」と読む句に「一二とれ三芳野の花月と雪」（時勢粧・一六一五・岡如萍）が、「ひとふた」と読む句に「千々の春も一二三代のはじめかな」（続山井・一一七九・方竹）がある。◇二を生じて 『老子』「徳経下・道化第四十二」は道が万物を生成する過程を「道生一、一生二、二生三、三生万物」（道は一を生じ、二を生じ、三は万物を生ず）」と説明する。

【**作者**】西岡泰徳（武蔵・江戸）。五句。

20 独立ちて改めぬ代や千々の春

小西似春

【**句意**】藩主として独り立ちななきつても、内藤家の御家風は改めないで代々受け継ぎ、千世の春を迎えられました。
【**解釈**】◇独立ち 独り立ち。自分の力で立つこと。「独立ち」を用いた句に「ありたつた独立つたる今年かな」（犬子集・二・貞徳／崑山集・三二七）、「竹の子や草木とくます独立ち」（崑山集・三七〇三・玄茂）がある。◇改めぬ代 これまでの家風を改めないことか。「改めぬ」と詠んだ歌例に「改めぬ契りやつらき織女のたはぶれ憎き中の月日を」（後水尾院御集・三一九）などがある。

【**作者**】小西似春（山城・京）。寛文く元禄（一六六一く一七〇四年）ごろ。大坂の人。江戸本町に寓し、のち下総国行徳の社職となる。もと里村家の門人にて連歌師。季吟門（大系図）。六〇句。

21 すぐな世や千歳の春を七帰り

須藤之也

【**句意**】まっすぐな世の中でございます。千年の春は七生のように永遠に続くことでしょう。
【**解釈**】◇すぐな世 まっすぐな世、正しくよく治まっている世の中の意。「すぐな世」の句に、「すぐな世や棹姫氏の玉の春」（寛文六年へ一六六六）歳旦発句集・一一〇四・兼豊）がある。◇七帰り 七回繰り返すこと。『俱舍論』「卷二十三・本論第六賢聖品第二」に「生極七返。七返言、顯七往三返生」。是人天中各七生義（生ずること極にして七返なり。七返の言は、七たび生に往返することを顯はす。是れ人天の中に、各七生するの義なり）」とあるように、人界及び天界に七度生を受けること。生は七生までとされ、以後の生はないとされることから、未来永劫の意となる。
【**作者**】須藤之也（陸奥・二本松）。五一句。

22 君の春人うやまつて臣下かな

須藤之也

〔句意〕あなた様の時代の春を寿いでおります。人が礼を知る人を敬うように家臣たちもあなた様に心服いたします。

〔解釈〕◇君の春 「御代の春」と同じ意。『歳旦発句集』には「君の春」を取り上げた句がまとまつて出てくる。たとえば、「盃や土も木も我が君の春」（明暦二年〈二六五六〉歳旦発句集・七〇四・喜春）、「道たるや文武あまねき公（まゐ）の春」（同七三六・重以）などがある。◇人うやまつて 「客といへば人うやまつて新酒かな」（時勢粧・九六五・又笑）と同じく「人を敬う」こと。『孟子』「離婁章句下」に「仁者愛人、有禮者敬人。愛人者、人恒愛之、敬人者人恒敬之（仁者は人を愛し、礼有る者は人を敬す。人を愛する者は、人恒に之を愛し、人を敬する者は、人恒に之を敬す）」とあり、本句は『孟子』の影響を受けていると思われる。◇臣下 「臣下」を用いた和歌の例は見当たらないが、俳諧の例に「御謀反を進申せばお盃（宗恭）／すすみ出たる臣下一人（梅翁）」（天満千句・第四・九七／九八）や「七夕のよるになつたら送らせん（禾刀）／役に立つまい臣下也けり」（二葉集・一二二八／一二二九）などがある。また、「臣」を用いた句に「君たれば臣も新春の御慶かな」（承応元年〈一六五二〉歳旦発句集・五八四・重頼）がある。

23 君が春のたとへに周の武州かな

石田未琢

〔句意〕周の武王が治めた「武州」ではありませんが、武蔵国を治めるあなた様の治世は武王の時代にたとえられることです。

吉田健一・松本麻子『桜川』注釈（一）

〔解釈〕◇たとへに あなた様の御代のたとえとして、の意。◇周 中国の古代王朝。最初の王は武王。聖王として知られる。句例に「周の代の言の葉草のもちいかかな」（続山井・一五〇〇・重信）がある。◇武州 武蔵国の別称。「周の武王」を掛ける。周の武王が治めた土地に比肩すべき武州（武蔵国）、の意。武州を治める風虎を武王になぞらえたもの。武州の句例に「早飛脚武州をさして時津風」（大坂独吟集・五四七・由平）がある。また、聖王を詠んだ句例に「賢聖や肩並べ出ん御代の春」（寛文九年〈一六六九〉歳旦発句集・一二七三・祐上）がある。

〔作者〕石田未琢（武蔵・江戸）。江戸の人。生年未詳。天和二年（一六八二）三月二〇日。未得の息、良堂と号す。未得門（大系図）。一五句。

24 文を左右に武州や君が春

辻自取

〔句意〕左手は学問をつかさどり、右手では武蔵国で武名を馳せるあなた様の時代の春です。

〔解釈〕◇文を左右に武 『日葡辞書』には、「文」は「書状を書く文。また、学問」とあり、「文武が二道」という用例が示され、「武」には「勇敢なこと、または、武術」との説明がある。また、『宝蔵』「巻之五」にある「鋪す」の項の例句「花の木を自身植ゆるや好き心」に並べて「右みぎ文左ひだり武万民和」（文を右にし武を左にして万民和す）が置かれる。「右」・「左」を詠む句に、「右や筆左の手梅花のかげ」（時勢粧・一一一八・石井如自）などがある。◇武州 23を参照。

25 江戸の海やつくとも築地君が春

橋本富長

〔句意〕江戸の海が尽きても、築地ではないですが、尽きることのないあなた様の時代の春です。

〔解釈〕◇江戸の海 「江戸の海」と詠んだ句例は「ほら貝や春知りそむる江戸の海」（江戸蛇之酢・八・泰徳）などがあるが、少ない。◇つくとも 尽くとも。江戸の海が尽きても、の意。◇築地 江戸湾沿いの埋め立て地。明暦の大火（一六五七年）の後に造成された。「尽きじ」を掛ける。「つくともつきじ」を用いた歌例に「一節に千世をこめたる杖なればつくともつきじ君が齢は」（拾遺集・二七六・大中臣頼基）がある。また、俳諧の例に「つくともつきじ御賀の祝ひ／飾りぬるひげこの竹も千代こめて（友静）」（続山井・四五三／四五四）がある。

〔作者〕橋本富長（山城・京）。一一二句。

26 江戸橋や幾代をかけて君が春

矢吹嘉品

〔句意〕江戸に架かっている橋よ。それが幾代にもわたって架かっているように、何代にもわたって続くあなた様の時代の春です。

〔解釈〕◇江戸橋 江戸の町に架かっている橋。句例に「富士白し江戸橋山の五月やみ」（誹諧東日記・三五八・工迪）がある。◇幾代をかけて 「かけて」は「橋」の縁語となる。「橋かけて」の句に「泉水に七夕渡す橋かけて」（大坂檀林桜千句・二七七・西鶴）がある。

〔作者〕矢吹嘉品（陸奥・岩城）。八九句。

27 一もつてくはんとうの代や君が春

松村吟松

〔句意〕一つの信念をもって全体を貫ぬき、関東を率いるあなた様の時代の春となりました。

〔解釈〕◇一もつて 『論語』「里仁第四」にある孔子の言葉「吾道一以貫之（吾が道は一以て之を貫く）」による表現。一つの信念をもって全体を貫く様をいう。◇くはんとう 「くはん」は「以貫之」の「貫」を掛ける。「くはんとう」は「御代は万句まづ巻頭の今年かな」（宝蔵・一四七・季吟）の例のように「巻頭」の意もあるが、加えて「関東」も掛けるか。

〔作者〕松村吟松（武蔵・江戸）。はじめ正恒、のち吟松。重頼門（大系図）。四〇句。

28 御紋さへやあふひても猶君が春

赤塚資仲

〔句意〕葵の御紋に逢っただけでもなお一層おめでたい、あなた様の時代春です。

〔解釈〕◇御紋さへ 御紋を見るだけでも、の意。◇あふひ 「葵」と「逢ふ」を掛ける。葵の御紋を詠んだ句に、「御紋とてことに時めく葵かな」（境海草・三二四・正甫）がある。

〔作者〕赤塚資仲（武蔵・江戸）。一三句。

29 上間に立つやのどけき君が春

福田調也

〔句意〕あなた様のお耳にも達しているでしょうか。立春を迎えて平穏な春がやってきました。

〔解釈〕◇上間に立つ 高貴な人のお耳に入れる。お耳に入れることを詠む句例に、「上々のお耳にも入るすずなかな」（続山井・一四六二・正信）がある。一般的には「上間に達する」であるが、ここでは「立春」の意味を響かせるため、「立つ」としたか。

〔作者〕 福田調也（武蔵・江戸）。調也、後に風琴子。江戸南伝馬町に住む。始め調和門、後に露沾門となり、露言を称す（大系図）。一四句。

大村可全

30 松の葉や数に千歳^年の君が春

小沢衆下

〔句意〕 松の葉の数のようにいつまでも続く、あなた様の時代の春なのです。

〔解釈〕 ◇松の葉や数に 『千載集』に「君が代に比べていはば松山の松の葉数は少なかりけり」（六三三・藤原孝善）とあり、この歌を踏まえた表現。松の葉の数のように年を重ねる御代、の意。◇千歳 長い時。「千歳」に松の葉の数を絡めた歌例に「千歳をもあかず有るべき松の葉の数に年にもなさむとぞ思ふ」（清慎公集・六五）がある。句例に「松のはかた千世にや千代を重菊」（時勢粧・一九二九・維舟）がある。

〔作者〕 小沢衆下（陸奥・二本松）。一一八句。

31 よい事のこれひとつやは君が春

阿形玉椿

〔句意〕 よい事はこれひとつだけではありません。よい事がたくさん起こるあなた様の時代の春なのです。

〔解釈〕 ◇よい事 「よい事」と詠んだ句例に「二つよい事や君が代花の春」（寛文四年（一六六四）歳旦発句集・九九四・元隣）がある。◇これひとつやは これひとつだろうか、いやそうではない、の意。句例に「三物は是ひとつやは君が春」（時勢粧・一九九〇・維舟）がある。

〔作者〕 阿形玉椿（山城・京）。一句

32 恐れながら酔^よふてもよかれ君が春

〔句意〕 恐れ多いことですが、酔ってもよいでしょうか、あなた様の世の春を迎えたので。

〔解釈〕 ◇恐れながら 口語表現。恐れ多いことですが、の意。用例は少ないが、同じ表現として『続山井』「恋誹諧連歌」の「恐れながらも文を捧ぐる／心強き鬼かと思ふ後朝に（鷗）」（六九七／六九八）がある。◇酔ふてもよかれ 「酔ふ」は「恐れながらよかれ」と「酔ふ」を掛ける。「酔ふ」の句例に、「酔ていはふ酒や麴の花の春」（歳旦発句集〈年次未詳〉・三二五・著英）がある。

〔備考〕 寛文一〇年（一六七〇）『歳旦発句集』一三一〇に同じ句が載る。

〔作者〕 大村可全（山城・京）。寛永一三年（一六三六）〜元禄二年（一六八九）一月二〇日。家名を白木屋という。京室町住。寛文二年（一六六二）、二七歳で江戸日本橋に呉服店白木屋を創業。季吟門（大系図）。八句。

33 楽な代や舜何人ぞ君が春

北村湖春

〔句意〕 安心して暮らすことのできる世の中です。中国古代の聖王である舜でさえも及ばないあなた様の時代の春なのです。

〔解釈〕 ◇寛文一二年 一六七二年。◇楽な 平穏な、安心な、の意。句例に「戸ごさぬや我が家楽な御代の春」（歳旦発句集〈年次未詳〉・三二二・湖春）がある。◇舜何人ぞ 「舜」は中国古代の聖王。「舜何人ぞ」は、中国古代の聖王である舜が何者というのか。あなた様には及ばない、の意であろう。句例に「二度や堯と舜禹の御代の春」（慶安三年（一六五

○「歳旦発句集・五四八・重以」、「菟舜の御代にもこゆる今年かな」（続山井・一一六八・貞徳）がある。

〔備考〕寛文一二年（一六七二）『歳旦発句集』一四八五に同じ句が載る。

〔作者〕北村湖春（山城・京）。慶安元（一六四八）年〜元禄一〇（一六九七）年一月一五日。季吟の長男。名は季重。薙髪して湖春と改める。二〇歳で宗匠として独立。季吟に従って江戸に移住。法橋。父に先だつて死去（大系図）。五三句。

34 鹿は鹿馬は馬なり君が春

望月千之

〔句意〕権勢におもねることなく、鹿は鹿だと言い、馬は馬だと言う家来の揃っているあなた様の世に春が到来しました。

〔解釈〕◇鹿は鹿馬は馬 『史記』『秦始皇本紀』にある趙高が二世皇帝に鹿を馬だと言って献上した際、左右の臣下は趙高の権勢を恐れ、その言の誤りを正す者が無かったという故事による。この故事を出典とする和歌の例に「鹿をみて馬といひける人だにも猪をばうしと思はざりけん」（散木奇歌集・一三四六）がある。また、俳諧の例に「鹿を馬といふにや鹿毛の駒迎」（続境海草・八〇二・林見）がある。

〔作者〕望月千之（山城・京）。延宝く天和ごろ。京都住。はじめ大原氏、のち望月氏と改む。重頼門。従弟千春とともに季吟門とも（大系図）。五句。

35 御当家や葵祭の神の春

高野幽山

〔句意〕將軍家の御紋である葵のように、仰いで神をお祭りする春が到来

しました。

〔解釈〕◇御当家 「御当家」は、ここでは徳川將軍家を指す。「御当家」を用いた句例に「御当家や千世をかさねて祝ふらん」（大坂檀林桜千句・五〇九・友雪）がある。◇葵祭 『毛吹草』の「誹諧四季之詞・四月」に「葵祭」が見える。ただし、葵祭（賀茂祭）は応仁の乱後中断し、復活したのは元禄七年（一六九四）のことであつて、この当時祭りは行われていない。「葵祭」は夏の季でもあることから、ここでは実際の葵祭を指すのではなく、「葵を祭る」の意であろう。「葵」を詠んだ句に「小葵やかざすおみやの神祭」（続山井・二八三九・重信）がある。◇神の春 神を迎えたためでたい正月のこと。「飛梅やかろがるしくも神の春」（守武千句・一）など多数の句がある。特に、『歳旦発句集』に用例が多く、この時代に好まれた表現。

〔作者〕高野幽山（山城・京）。？〜元禄一五（一七〇二）年九月一日。別号、丁々軒。重頼門か。京都の人。江戸に移住。晩年、伊勢に移住。藤堂任口に仕える（大系図）。四四句。

36 鶴ヶ岡これぞ源氏の神の春

岩城住露沾

〔句意〕鶴ヶ岡八幡宮、これこそ源氏の守り神であり、ここにも春が到来しました。

〔解釈〕◇鶴ヶ岡 鶴岡八幡宮のこと。現在の神奈川県鎌倉市にある神社。鎌倉八幡宮とも呼ばれる。武家源氏、鎌倉武士の守護神。「千年も飽かぬぞ鶴が岡つつじ」（ゆめみ草・六八〇・頼広）のように長寿を祝う鶴の意も含む。◇源氏 源氏を称する徳川將軍家。武家としての源氏を詠んだ句は少ないが、「重代の源氏のはたを取出し」（犬子集・三〇九五・貞徳）、「世は源氏けふ立つ春や太郎君」（寛文八年（一六六八）歳旦発句集・一一〇六・似空）などがある。内藤家は藤原氏の分流。

〔作者〕内藤露沾（陸奥・岩城）。明暦元（二六五五）年五月一日、享保一八（一七三三）年九月一日。本名、内藤義英、のち政策。磐城平藩主風虎の次男。嗣子に立てられるが、家中の内紛により廃嫡。宗因門。門人に露言、沾徳、露月、沾圃、沾涼らがいる（大系図）。四五句。

37 治まるや大國御魂の神の春

野間政安

〔句意〕世の中がよく治まっています。大國主命を寿ぐ春が到来しました。

〔解釈〕◇治るや 世の中が平穩無事で、治まっていること。句例に「治るやゆるり関東の御代の春」（貞徳誹諧記・五五二・一貞）がある。◇大國御魂 「大國」は日本のこと。「大國御魂」は大國主命を祭っている大國魂神社を言うか。大國魂神社は正保三年（一六四六）の火事で社殿が焼け、寛文七年（一六六七）、將軍家綱の命により再建された。

〔作者〕野間政安（伊勢・朝熊岳）。五六句。

38 大黒や手なづち祝ふ神の春

水野林元

〔句意〕大黒天が自ら小づちを握って祝う神の春が到来しました。

〔解釈〕◇大黒 七福神の一つ大黒天のこと。大國主命を本地とする説がある。「大黒」を詠んだ句例に「元三や多びす大黒福の神」（崑山集・二五四・伊人）がある。◇手なづち 手名椎は出雲の国つ神。足名椎の妻。天照の弟である須佐之男が出雲で八岐大蛇を退治した後結婚した櫛名田比売の母。大國主、須佐之男の六世の孫とされる。右手に打ち出の小槌をもつ大黒天の姿から手名椎を登場させたのであろう。「手なづち」に「小槌」の「つち」を掛ける。手名椎を詠んだ和歌や俳諧の例は見いだ

せない。

〔備考〕前句で大國主命が登場したので、大國主命と同一視されることのある大黒天の句を持って来たのであろう。以下、しばらく神の句が続く。

〔作者〕水野林元（陸奥・二本松）。奥州二本松丹羽家中（大系図）二〇一句。

39 注連縄やかみむすびの神の春

吉田間也

〔句意〕注連縄を誰が結んだのでしょうか。高御産巢日を祭るめでたい春を迎えることになりました。

〔注釈〕◇注連縄 注連縄を詠んだ句は多く、例えば「しめ縄は去年と今年年の境い目かな」（犬子集・二五・常勝／崑山集・一九）などがある。◇たかみむすび 高御産巢日のこと。高御産巢日は記紀に見える神で、造化三神の一つ。天地開闢の時、天之御中主について、神産巢日とともに現われた。なお、「たかみむすび」は「誰がみ結び（誰が結んだのか、の意）」に掛ける。「むすび」は縄の縁語。

〔作者〕吉田間也（陸奥・岩城）。八七句。

40 門松や久しきしるし神の春

岡部任幸

〔句意〕門前に立っている松はいつまでも続くことのしるしであり、靈験もあらたかな神を祭る春を迎えました。

〔解釈〕◇門松 松は常緑樹であり、変化のないことから永続性を寿ぐ。「門松や御代長久のかがみ草」（ゆめみ草・一・空存）のようにいつまでも続く世のめでたさを表す。◇久しきしるし 久しいことのしるし、長く続くことの象徴、の意。歌例に、「天の下の久しき御代のしるしには三笠

の山のさか木をぞさす」(新勅撰集・四四六・藤原行家)がある。

〔作者〕岡部任幸(参河・吉田)。三三句。

41 佐保姫や出る太刀輪の神の春

釈加友

〔句意〕佐保姫がまつすぐにお立ちになったことで、めでたい神の春がやってきました。

〔注釈〕◇佐保姫 春をつかさどる女神。正月を祝う句によく使われる。

句例に「佐保姫や北の御かた神の春」(時勢粧・七四七二・時次)などがある。◇出る太刀輪 文意不明。この句は『歳旦発句集』(寛文七年(一六六七)・一一八三)に「佐保姫や出立からは神の春/加友」の形で収録されている。「出る太刀輪」は「出立からは」の誤記と見なし解釈した。「佐保姫」に「棹」を掛け、「竿立ち」としたか。「竿立ち」とは、馬が前足を上げ、まつすぐに立ち上がるさま。

〔作者〕釈加友(伊勢・山田)。寛文(一六六一〜七三)ごろに六〇〜七〇歳で没か。別号、般舟庵、春陽軒。はじめ望一門、のち貞徳門。伊勢国松坂樹敬寺の塔頭法樹院の住職(大系図)。一六句。

八幡奉納

42 棹姫御竹とや等し神の春

水野賛賢

〔句意〕春の女神である棹姫さまは、棹の竹というわけではないが、竹と同じように変わることがありません。その神がお出でになる春が到来しました。

〔解釈〕◇八幡 現在のいわき市平にある飯野八幡宮を指すか。飯野八幡は平城の城内にあった。◇棹姫御 佐保姫のこと。「たけ(竹)」との縁

で「棹」とした。句例に「真すぐな御代のはじめや佐保姫御」(貞徳誹諧記・五五〇・常友)がある。◇竹 色が変わらないことから、松と同じく、永続するものたとえ。歌例に「ほどなくも取りいだせとや思ふべき松と竹とは久しきものを」(散木奇歌集・一三一一)がある。◇等し

「等し」を用いた句例に「うきしづむ平家は夢に等しくて」(西山宗因句・五二七・宗因)がある。

〔作者〕水野雀巢軒賛賢(尾張・名古屋)。刈谷城主、水野下野守忠正の五代孫。一一句。

寛文七年未正月中旬

43 歳神の齋宮ならし佐保姫御

小谷常明

〔句意〕歳神の中でも美しい佐保姫さまは、伊勢の齋宮のようなものなのでしょう。

〔解釈〕◇歳神 としがみ、年神とも。「歳徳神」に同じ。その年度における福德や五穀豊穰をつかさどる神。この神のいる方角を恵方という。句例に「年徳の神木ならしはなの春(寛文九年(一六六九)歳旦発句集・一八五・宗雅)がある。◇齋宮ならし 齋宮は伊勢神宮に奉仕した未婚の内親王。「ならし」は「なるらし」で、「きつと…であるはずだ」の意。「齋宮ならし」は「齋宮であるのだろう」の意。◇佐保姫御 佐保姫と齋宮を用いた句に「佐保姫や齋宮にたてん伊勢桜」(続山井・二三一五・重以)がある。

〔備考〕この句は『時勢粧』一〇〇六にも所収される。『ゆめみ草』四一に「年徳の齋の宮か佐保姫御」(休安)という句がある。

〔作者〕小谷常明(因幡・鳥取)。四句。

44 神の岩戸伊勢海老鏡や明けの春

松山玖也

〔句意〕神代の昔に海老錠で閉ざされていた天の岩戸を開けたように、伊勢海老を飾る新春を迎えました。

〔解釈〕◇神の岩戸 天の岩戸の意。◇伊勢海老錠 「伊勢」は「神の岩戸」から導かれる。「伊勢海老錠」は「伊勢海老」と海老の形をした錠前である。「海老錠」とを掛ける。新春に「伊勢海老」を飾ることを詠んだ句例に「伊勢海老も内外にかざれ門の松」(時勢粧・一〇一四・日野好元)がある。また、「海老錠」の句例に「天の戸の海老錠なれや三日の月」(ゆめみ草・一九〇四・隼之介)、「伊勢海老は岩戸の鎖や秋の海」(崑山集・六五〇三・舎次)がある。◇明の春 ここでは「神の岩戸を開ける」の意を掛ける。句例に「天の戸や明の春たつ日花門」(延宝二年(一六七四)歳旦発句集・一六八六・国信)がある。

江戸にて

45 寅の時虎の御門や明けの春

稲垣久儔

〔句意〕寅の刻に虎の御門が開けられ、新春を迎えました。

〔解釈〕◇寅の時 寅の刻のこと。午前四時頃。七つともいう。句例に「大磯の松風寒し寅の時」(犬子集・一五三二・徳元/塵塚誹諧集・七八六)がある。◇虎の御門 江戸城の虎の門のこと。虎の門の近くに内藤家上屋敷があった。「虎の門」を詠む和歌、俳諧の用例は見当たらない。

〔作者〕稲垣久儔(陸奥・岩城)。一〇句。

46 人はいさ心はしらり明けの春

佐々惟友

〔句意〕「人はいさ心も知らず」という和歌のように、人の心はさあわかりませんが、白々と明けて正月を迎えました。

〔解釈〕◇人はいさ 人はさあ、の意。「人はいさ心も知らずふるさと」花ぞ昔の香にほひける」(古今集・四二・紀貫之)が本歌。◇しらり貫之歌の「知ら」と、夜が明けて空が「白」むを掛ける。句例に「野はしらりしらりと明る五月闇」(正章千句・九四三)がある。

〔作者〕佐々惟友(大和・郡山) 四句。

立春遅き元旦に

47 取る年や先片隙を明けの春

柏木万年子

〔句意〕またひとつ年を取ります。元旦の後に立春になるので、余裕をもって正月を迎えることにいたします。

〔解釈〕◇立春遅き元旦に 元旦が立春より遅い年に、の意。◇取る年や 新年を迎えて年をとること。句例に「年をとるゆへか若やく今日の春」(ゆめみ草・五三・有次)がある。◇先片隙 「まづかたひま」と読むか。「片」は「少し」の意で、「片隙」は少しのひまをいう。仕事などのあいまのこと。◇明けの春 「明け」は「隙」に続けて「ひまになる」の意の「ひまを明く」を掛ける。句例に「朝氷ひまのあいたる詠かな」(毛吹草・六五五・一正)がある。「片ひまを明け」は「(少し暇ができたので) 余裕をもって」と解する。

〔作者〕柏木万年子(武蔵・江戸) 六三句。

遁世の身なれば

48 遁世やことごとくなく明けの春

塩川如白

〔句意〕俗世間との交わりを立っている身なので、特になんということもなく新春が明けました。

〔解釈〕◇遁世 俗世間との関係を絶つこと。「遁世」を用いた句例に「奥山に通世したか郭公」（犬子集・六九五・休音／崑山集・二九三九）などがある。◇ことごとくなく とくになんということもなく、の意。ことごとくなく明けた、と続く。歌例に「秋の夜も名のみなりけり逢ふといへばことごとくなく明けぬるものを」（古今集・六三五・小野小町）があり、本発句の本歌と見なせる。

〔作者〕塩川如白（陸奥・岩城）。一四九句。

陸奥岩城赤目崎と云ふ所にて

49 春の色や東方まさに赤目崎

浅香研思

〔句意〕新春の様子が見えます。東の空が磐城平城のある赤目崎という地名の通りに明るくなって参りました。

〔解釈〕◇春の色 色は様子、景色。春の様子。句例に「春の色や霞になびく松飾」（寛文二年（一六七二）歳旦発句集・一四三六・理善）がある。◇東方 「東方」を用いた句例に「春はけふ東方よりや九千歳」（崑山集・三二九・貞徳）がある。◇赤目崎 現在のいわき市平にあるいわき駅の北側をいう。磐城平城があった場所は「赤目崎見物岡」（「物見岡」とも）と呼ばれていた。「赤目」は夜が明けて空が明るくなってきたことかもしれない。

〔作者〕浅香研思（陸奥・岩城） 一一二〇句。

50 明けて春城の太鼓や陸奥の国

松山玖也

〔句意〕新春が明けて、磐城平城の太鼓が鳴り響いています。明け六つの時刻に陸奥国で。

〔解釈〕◇明けて春 年が明けて新春を迎えたこと。◇城 磐城平城のこと。◇太鼓 「たい」と「平」を掛ける。時を告げる太鼓の句例に「鐘よりも時の太鼓の音は能て」（誹諧独吟集・二八八・立圃）がある。◇陸奥の国 現在の東北地方。磐城平藩は陸奥国の南部に位置する。「明け六つ」を掛ける。

〔作者〕松山玖也（撰津・大坂）。14参照。四五二句。

※（よしだ・けんいち／いわき明星大学大学院人文学研究科日本文学専攻）

※（まつもと・あきこ／日本文学）